

二十四孝をめぐる説話受容

——漢文帝、唐夫人を中心に——

石井 亜矢子

〔抄録〕

御伽草子『二十四孝』の「漢文帝」「唐夫人」の孝行譚は、孝子伝には載せられていない説話である。特に漢文帝は伝典である孟蘭盆経にも載せられ、説話の普及には仏教が深く関わっていると考えられる。また二十四孝のなかでも南葵本孝行録では、漢文

帝と唐夫人の孝行譚には語り手が描かれる。このように他の二十四孝とは異なる要素を持った両孝行譚について考察する。

キーワード 二十四孝、漢文帝、唐夫人、孟蘭盆経

はじめに

御伽草子『二十四孝』の第一の典拠は、全相二十四孝詩選である。

漢詩の内容や挿絵が一致することからそのことがわかる。『二十四孝』

第二話「漢文帝」の本文の内容を示せば、次の通りである。

漢文帝

仁孝臨天下 巍々冠百王

漢廷事賢母 湯藥必親嘗

漢の文帝は、漢の高祖の御子なり。いとけなき御名をば、恒とぞ

申し侍りき。母薄太后に孝行なり。万の食事を参らせらるる時は、まづみづからきこしめし試み給へり。兄弟もあたましましけれども、この帝ほど、仁義を行ひ、孝行なるはなかりける。この故に、陳平、周勃などいひける臣下たち、王になし参らせたり。それより、漢の文帝と申し侍りき。しかるに、孝行の道は、上一人より下万民まで、あるべきことなりと知るといへども、身に行ひ、心に思ひ入ることはなりがたきを、かたじけなくも、四万余州の天子の御身として、かくのごときの御ことわざは、尊かりし御ところざしとぞ。さるほどに、世も豊かに、民も安く住みけるとなり。（御伽草子）¹⁾

漢文帝

仁孝臨天下 巍々冠百王

漢廷事賢母 湯藥必親嘗

前漢文帝高祖之子、母薄太后。帝本養无怠。湯藥必見嘗而後進母、乃為仁孝之賢君也。(全相二十四孝詩選²)

全相二十四孝詩選は、いわゆる二十四孝(三つの系統が確認される)の一つだが、孝子伝から二十四孝への交替という文学史の流れから考えて、二十四孝の母体が孝子伝であることは直ちに確認できる。しかし、漢文帝と唐夫人の孝行譚は両孝子伝や逸文孝子伝には載せられていない。このことは、一体何を意味しているのか。考えられることは、その二人が孝子伝にはなく、二十四孝になって取り入れられた人物であるということであろう。それぞれの享受の流れを辿ると、例えば漢文帝の孝行譚は孟蘭盆經の注に載せられている³。このことから二十四孝は必ずしも儒学的な要素のみを取り入れていたのではないことがわかる。中国における儒仏の関係は道端良秀氏が指摘するように⁴、家を大事にする儒教と出家を伴う仏教とは本来相容れない。しかし孟蘭盆經疏を記した宗密のように、父母報恩のために出家をするという考えが普及していたこともわかる。以上のように、漢文帝の孝行譚が広まった背景には、こうした形での儒仏の普及が関わっていたことが挙げられる。

次に、漢文帝と同じように孝子伝には現れない唐夫人の二十四孝を載せる。

唐夫人

孝敬崔家婦 乳姑晨盥梳

此恩無以報 願得子孫如

唐夫人は、姑長孫夫人、年たけ、よろづ食事、齒にかなはざれば、つねに乳をふくめ、あるいは、朝ごとに髪をけづり、そのほか、よく仕へて、数年養ひ侍り。ある時、長孫夫人、わづらひつきて、この度は死せんと思ひ、一門一家を集めて言へることは、「わが唐夫人の数年の恩を報ぜずして、今死せんこと残り多し。わが子孫、唐夫人の孝義をまねてあるならば、かならず末も繁昌すべし」と言ひ侍り。かやうに姑に孝行なるは、古今まれなるとて、人みな、これをほめたりと。されば、やがて報いて、末繁昌すること、きはまりもなくありたるとなり。(御伽草子⁵)

唐夫人

孝敬崔家婦 乳姑晨盥梳

此恩無以報 願得子孫如

崔南山家之盛、罕比山南曾祖、王母長孫夫人、年高無齒。祖母唐夫人、事姑至孝。每旦櫛縱拜於階下、即升堂乳其姑。長孫夫人不粒食、數年而康寧、一旦疾病、長幼咸集、宣言無以報新婦恩、願新婦有子有孫、皆如新婦愛敬、則崔之門安得不昌大乎。(全相二十四孝詩選⁶)

唐夫人は孝子伝が作られた時代にはまだ存在しない新しい人物である

ため、二十四孝が編纂される際に漢文帝と共に意図的に追加されたことがわかる。同じように孝子伝に載せられていない孝行譚でも、それぞれ異なる背景があることが見て取れる。本章では、こういった特徴を持つ二十四孝の漢文帝、唐夫人について考察を行ってゆく。

第一章 二十四孝「漢文帝」「唐夫人」の典拠

ここで、二十四孝における漢文帝の成立についてももう少し具体的に考えてゆく。御伽草子と全相二十四孝詩選は先に挙げた通りである。次に、残る二十四孝の系統である日記故事と孝行録の内容を載せる。

親嘗湯藥

前漢文帝名恒、高祖第三子、初封代王。生母薄太后。帝奉養無怠。母嘗病三年、帝目不交睫、衣不解帶、湯藥非口親嘗、弗進。仁孝聞天下。

仁孝臨天下 巍巍冠百王

漢庭事賢母 湯藥必先嘗（日記故事）^⑦

漢皇嘗藥

袁盎字詝言於文帝曰、陛下居代時、太后嘗病三年、陛下不交睫解衣、湯藥非口所嘗、不進。夫曾參以布衣猶難之陛下、以王者修之過曾參遠矣。

賢哉漢文 既孝且仁 侍疾太后 湯藥必親 衣不解帶 三年一心
袁詝有語 遠過曾參 仁孝臨天下 巍巍冠百王 漢廷事賢母 湯藥必

親嘗（孝行録）^⑧

日記故事は御伽草子の内容と同じであるが、孝行録では御伽草子・全相二十四孝詩選・日記故事の内容に加えて、太后が三年間床に臥していたこと、文帝が寝ずに・衣服も着替えずに看病をしたこと、曾参よりも優れていることの三点が書かれている。また「袁盎字詝言於文帝曰」という文章は、御伽草子や全相二十四孝詩選、日記故事には見られない。孝行録ではこの表現を採ることにより、袁盎という人物が、文帝に対して文帝自身はどういった孝行を行ってきたのかを語る体裁を取っていることがわかる。では、なぜ袁盎は文帝に今までの孝行について話さなければならなかったのだろうか。

史記卷一〇一袁盎晁錯列伝第四十一によると、文帝の弟・淮南王が病死してしまい、そのことについて文帝が自分を責め、そこで袁盎が文帝を慰めるという場面が描かれている。

盎曰、上自寛。此往事。豈可悔哉。且陛下有高世之行者三。此不足毀名。上曰、吾高世

行三者何事。盎曰、陛下居代時、太后嘗病三年。陛下不交睫、不解衣、湯藥非陛下口所嘗、弗進。夫曾參以衣猶難之今陛下。今陛下親以王者脩之。過曾參孝遠矣。（史記）

ここでは、「盎曰」というように、孝行録と同じように袁盎が述べた内容のなかに文帝の孝行譚が含まれている。「陛下居代時……過曾參

孝遠矣。」の部分孝行録と一致することから、孝行録は史記を引用していることになる。同じように漢書卷四十九でも、¹⁰⁾

盎曰、上自寛。此往事豈可悔哉。且陛下有高世之行者三。此不足以毀名。上曰、吾高世行三者何事。盎曰、陛下居代時、太后嘗病三年。陛下不交睫、不解、不湯藥非陛下口所嘗、弗進。夫曾參以衣猶難之今陛下。親以王者修之。過曾參孝遠矣。（漢書）

というように、「盎曰」で始まり、袁盎が文帝の優れた点を挙げている。以上のことから、漢文帝の孝行譚は史記や漢書を典拠として持ち、二十四孝においては孝行録が古くからの形を残していると言える。

次にここで挙げた漢書の内容を引用している文献を紹介する。芸文類聚卷二十では、¹¹⁾

漢書曰……又曰、文帝母薄太后疾。文帝侍養、數年衣不解帶、親供粢盛、坐罪不及父母下哀矜之詔。（芸文類聚）

とある。ここでは、漢書から引いていると書いてはいるが、着替えもせずに母に仕えたという短い内容へと変わっており、母が床に臥す具体的な年月や寝ないこと、薬を味見したこと、曾参との比較は省かれている。温公家範卷三では、¹²⁾

漢文帝為代王時薄太后常病三年、文帝目不睫不解衣、湯藥非口、

所嘗弗進。（温公家範）

と、曾参との比較は書かれておらず文章も簡略化されているが、史記、漢書と内容が一致する。しかし、芸文類聚、温公家範においては史記、漢書や孝行録に見られた「盎曰」「袁盎曰」という表現が抜けていることがわかる。

次に、唐夫人の成立についても具体的に考察してゆく。日記故事と孝行録の内容は以下の通りである。

乳姑不忍

唐崔山南曾祖母長孫夫人、年高無齒。祖母唐夫人、每日櫛洗、升堂乳其姑。姑不粒食數年而康、一日病。長幼咸集、乃宣言無以報新婦恩。願子孫婦、如新婦孝敬矣。

孝敬崔家婦 乳姑晨盥梳

此恩無以報 願得子孫如（日記故事）¹³⁾

長孫感婦

柳玘曰、崔山南、昆季子孫之盛、鄉族莫比。山南曾祖母長孫夫人、年高無齒。祖母唐夫人、事姑孝。每旦櫛縱笄、扞於階下、昇堂乳其姑。長孫夫人、不粒食數年而康寧。一日疾病。長幼咸集。宣言、無以報新婦恩。願新婦有子有孫、皆得如新婦孝敬。則崔之門、安得不昌大乎。

姑老無齒 有婦曰唐 櫛笄以扞 乳哺于堂 數年不粒 尚得強康

神明是感 門戸宜昌孝敬崔家婦 乳姑晨盥梳
此恩無以報 願得子孫如（孝行録）¹⁴

漢文帝と同じように、日記故事では御伽草子・全相二十四孝詩選と比べて大きな変化が見られないが、孝行録では「柳玼曰」というように柳玼が語る内容のなかに唐夫人の孝行譚が含まれている。このことは、漢文帝と同じように孝行譚を語る視点が明確に存在すると言えよう。孝行録と同様に小学でも、

柳玼曰、崔山南、昆弟子孫之盛、鄉族罕比。山南曾祖母長孫夫人、年高無齒。祖母唐夫人、事姑孝。每旦櫛縱筭、扞於階下、即升堂乳其姑。長孫夫人、不粒食數年而康寧。一日疾病。長幼咸萃。宣言、無以報新婦恩。願新婦有子有孫、皆得如新婦孝敬。則崔之門、安得不昌大乎。（小学）

と、柳玼が唐夫人のことを語る体裁を取っている。成立年代から考えて、『小学』以前には『唐書』巻百六十三がある。¹⁵

崔山南、昆弟子孫之盛、仕族罕比。山南曾祖母長孫夫人、年高無齒。祖母唐夫人、事姑孝。每旦櫛縱筭、扞於階下、升堂乳其姑。長孫不粒食者數年。一日病言、無以報吾婦、冀子孫皆得如婦孝。然則崔之門、安得不大乎。（唐書）

唐書の内容を踏まえると、小学は唐書から大きく内容を変化させていない。なお唐書の語り手については後述する。

漢文帝と唐夫人について、共通の問題点として見られるのが「袁盎字筭言於文帝曰」「柳玼曰」というように、本来は誰かが孝行譚を語ったという点である。このことについては後ほど詳しく考察してゆく。

第二章 二十四孝「漢文帝」と孟蘭盆經

漢文帝については先に述べたように、史記、漢書、芸文類聚、温公家範にその内容が見られることを確認した。唐夫人は現段階では唐書までしか遡ることができないが、両者に更に違いを見出すのならば、漢文帝は仏典にもその内容が記されていることが挙げられる。まずは該当する本文を挙げる。

三病則致其憂者、儒中如文帝先嘗湯藥。武王不脫冠帶。釈中如太子以肉為藥。高僧以身而擔。（孟蘭盆經疏）¹⁷

儒中漢書云、文帝母疾病踰年、文帝目不睫不解衣冠、湯藥不嘗、不進。礼記云、文王有疾、武王不脫衣冠而養。文王一飯、亦一飯、文王再飯、亦再飯。旬有二日乃間。（孟蘭盆經疏新記）¹⁸

これらの文章は、孟蘭盆經の注と、その注に更に注を付したものである。孟蘭盆經は、餓鬼道に落ちた母親を目蓮が救うという内容となっており、いわゆる「お盆」として現代の日本でも受け入れられている。

しかし梵語の原典は残っておらず、現存するのは仏説孟蘭盆經である。その注として残るものが唐代に宗密が記した孟蘭盆經疏である。孟蘭盆經疏に更に注を付けたものが宋代に元照が記した孟蘭盆經新記である。

では両書の内容を確認してゆく。孟蘭盆經疏では、漢文帝が薬を嘗めるということだけが書かれている。それが「高僧以身而擔」というように評価されている。その内容の出典を示したものが孟蘭盆經新記に書かれる。孟蘭盆經新記には漢書と礼記が挙げられている。漢書にあたる部分が「文帝母疾病踰年、文帝目不睫不解衣冠、湯藥不嘗、不進」である。ここでは漢書の内容が簡略化されており、具体的な年数や曾参のことが省かれている。ここでも注目すべきは、漢書から引かれたにも関わらず、袁盎が語ったということは一切触れられていないことである。これについては唐夫人と併せて後述する。

漢書の次に引かれたものが「文王有疾、武王不脱衣冠而養。文王一飯、亦一飯、文王再飯、亦再飯。旬有二日乃間」で、これは礼記文王世子第八にあたる。¹⁹礼記では、文帝が父に対してどのように仕えたのかということ、文帝の体調が悪い時は子の武王も文帝に対して同じように仕えていたということが書かれている。また、孟蘭盆經疏の「病則致其憂」にも出典がある。これは『孝經』紀孝行第十の一節にあたる。²⁰

孟蘭盆經という仏典の注釈に儒教が関わってくるということはどういうことだろうか。現在、梵語の原書が見つかっていないことから偽經（疑經）とされている。²¹しかし、偽經であったとしても普及しな

ったということではない。こうして仏教が広がってゆく際に、『孝經』の一文や漢文帝が用いられた。つまり、漢文帝の話が広がってゆく過程には仏教が深く関わっていたということが言える。儒教と仏教が完全に遮断されていたのではなく、仏教の教えを説くために、中国で古代から受け入れられていた儒教の教えを引いてきたのだと考えられる。このような儒教と仏教の関係は、敦煌文書のなかにある。²²以下にその本文を記す。

漢文帝母薄太后疾、文帝侍養數年、衣不解帶、親躬耕力作、將得穀以供粢盛。制天下有罪者、不得及父母。（勵忠節鈔）

目不交睫

漢薄姬夫人染疾、文帝至孝、目不交睫、衣冠不解、以日繼夜。

（不知名類書甲）

これらが示す内容はまさに二十四孝と同じで、仏教都市とされた敦煌でも漢文帝の孝行譚が受け入れられていた根拠となる。こうして漢文帝は、仏教を経由した儒教に基づく説話として、仏教と儒教の関わりを追及するひとつの材料となる。一方で、唐夫人には具体的な仏教との関わりは見られない。その原因は唐夫人のいた時代が新しくなったことが一番に挙げられる。しかし実際に唐夫人の孝行譚は仏教と無縁であったのかどうかは、現存資料が少ないため確定できない。漢文帝は、孝子伝に載らないながらも仏教を通して知れ渡っていったために二十

四孝において選定されたと考えることができるが、他の二十四孝の孝行譚と仏教との関わりについては今後の課題とする。

第三章 漢文帝・唐夫人説話の話者の視点

先に指摘したように、漢文帝と唐夫人の孝行譚では「○○曰」というように語り手の視点を介していることが特徴である。いま一度、その記述に注目して資料を整理する。

漢文帝

- ・御伽草子（なし）
- ・全相二十四孝詩選（なし）
- ・日記故事（なし）
- ・孝行録「袁盎字詡言於文帝曰」
- ・史記「盎曰」
- ・漢書「盎曰」
- ・芸文類聚（なし）
- ・温公家範（なし）
- ・孟蘭盆經疏（なし）
- ・孟蘭盆經疏新記（なし）

唐夫人

- ・御伽草子（なし）
- ・全相二十四孝詩選（なし）

- ・日記故事（なし）
- ・孝行録「柳玘曰」
- ・小学「柳玘曰」
- ・唐書（後述する）

まず両者に共通している点は、孝行録においては従来の形を残しているのに対し、御伽草子・全相二十四孝詩選・日記故事では完全に失われていることである。

漢文帝では史記を最古だとすると、史記から孝行録の間にある芸文類聚、温公家範、孟蘭盆經疏、孟蘭盆經疏新記と御伽草子・全相二十四孝詩選・日記故事は史記と系統を別にするということになる。史記においては、袁盎晁錯列伝に収められていることからわかるように、漢文帝にまつわる説話ではなく袁盎の伝記の中で記された内容である。そのことが前提にあるならば、史記、漢書において重要とされるのは漢文帝の孝行譚ではなく、袁盎が漢文帝に対して良く仕えていたことである。そうした場合は、袁盎が文帝にこう言ったということを欠くことはできない。一方で芸文類聚、温公家範、孟蘭盆經疏、孟蘭盆經疏新記では、袁盎が語った中身だけが抜粋されることとなった。類書、家訓といった性質上、そこで中心となるのは史記における孝行を尽くした漢文帝の話題であり、袁盎が語った事実が必要がなくなる。孟蘭盆經疏新記は芸文類聚と同じように漢書から引用していると本文に記されているにも関わらず、袁盎の部分は削っている。孟蘭盆經疏、孟蘭盆經疏新記も芸文類聚、温公家範と同じように、文献の用途に合わ

せて必要な部分だけを載せていると考えられる。前述の考察によつて、漢文帝には漢書から伝へ、そして二十四孝へという流れがあることがわかったが、孝行録は伝典の影響を受けたというよりは史記や漢書を典拠としているため、必ずしも全てが一本道で繋がっているのではなく、実に複雑に受け入れられていったと言える。

唐夫人の孝行譚が載せられているのは唐書の柳公綽の伝記のなかで、柳公綽は柳玼の祖父にあたる。また柳公綽の伝記でありながらも柳玼にまつわる内容も書かれている。唐書の該当箇所から遡ると「玼嘗述家訓以戒子孫曰」という記述が見られる。²³「家訓」は柳氏家訓で、それを元に柳玼が子孫に語るということだ。そしてその語る中身に唐夫人の孝行譚も含まれていることになる。

次に、柳氏家訓の性格を確認する。ここでは、語り手である柳家と、柳家が語る崔家が登場することが確認される。柳玼が語る時代には崔家が栄えており、その理由は崔山南の祖母である唐夫人が、崔山南の曾祖母にあたる長孫夫人に献身的であつたからと書かれている。唐夫人の良い行いが、孫の代になつてようやく成果が出てくるということだ。小学でも同じように、柳玼が崔山南の様子を見て、唐夫人の話を語るという視点を持っている。二十四孝になつてからは、孝行録が柳氏家訓と同様の形態であることがわかる。しかし、柳玼の存在がなくなつてしまふのが全相二十四孝詩選と日記故事である。ここでは柳玼曰くといった表現はなくなっているが、崔家の様子については未だ述べられている。つまり、柳玼の記述がないだけで、家訓として語られていたという要素は残っているのが全相二十四孝詩選と日記故事であ

る。そして御伽草子では、崔家の内容も省かれた形で掲載され、本来の家訓としての要素は一切削り取られてしまつたと言える。唐夫人の説話については、本来家訓の挿話であつたものが徐々に変化してゆき、最終的に説話へと変化していった様子を伺うことができる。

おわりに

孝子伝には載せられていない二十四孝の孝行譚である漢文帝と唐夫人を用いて、それぞれがどのように二十四孝まで至つたのか、またそれぞれの特徴について言及した。これらの孝行譚は元々、何れかの人物が語つた孝行譚である。それが二十四孝へと編纂されてゆく過程で、誰がその話を語つたのかということが削られ、冒頭に記した御伽草子の形になつている。こうした流れは、かつて誰かが語つた話、つまり挿話であつたものが、説話として受け入れられていった過程である。孝子伝には載せられておらず且つ特徴的な書き方を残すこの二話によつて、二十四孝の成立についても言及することとなった。

また漢文帝は、その孝行譚が広がつてゆく際に仏教が大きく関わつていたことがわかつた。なおこの流れは日本の唱導書でも汲まれ、言泉集の金沢文庫本と叡山文庫真如藏本の亡父帖には、²⁴

文王有疾、武王不脱衣服。（言泉集）

と、孟蘭盆經新記から引かれたと思われる内容がある。漢文帝につい

ては、孝子伝を経由しなかった代わりに仏典との関係が浮き彫りになった。

儒教の考えである孝を主題とした二十四孝と仏教とが関わりを持つことは異例ではあるが、漢文帝に限らず敦煌から幾つかの孝行譚が見つかっているということは、二十四孝・孝子伝における他の孝行譚にも仏教との深い関連を見出すことができると思われる。

〔注〕

- (1) 『御伽草子集』（日本古典文学全集三十六、大島建彦校注、小学館、一九七四年）所収
- (2) 『二十四孝詩選』（全国書房、一九四六年）
- (3) 仏説孟蘭盆経疏（大正新修大蔵経第三十九卷所収、大正新修大蔵経刊行会、一九二九年）
- (4) 道端良秀氏の『唐代仏教史の研究』（法蔵館、一九五七年）及び『仏教と儒教倫理』（平楽寺書店、一九六八年）に拠る。
- (5) 注(1)前掲書。なお大島氏の現代語訳によれば、「乳姑晨盥梳」の部分で「姑に乳を飲ませて、毎朝早くに手を洗い、髪をとかしてやつた」とし、本文では「毎朝髪をとかしたり」とある。しかし全相二十四孝詩選などを見ると、唐夫人が毎日自分の髪を束ねて、階下から拝み、堂に上って長孫夫人の世話をするという流れが確認できたが、髪を整えるのは唐夫人自身の話であるという解釈が適当だと思われる。なお髪をとかすといった表現は全相二十四孝詩選洪武版では「縦」という字で表されている。これは髪をまとめるという字で、洪武版では正しく表記されているが、竜谷大本や南葵本孝行録では「縦」と誤表記されている。本文解釈の相違の原因は、こうした文字表記の間違いにある。
- (6) 注(2)前掲書
- (7) 日記故事大全（和刻本類書集成第三集所収、汲古書院、一九七七

年）

- (8) 『孝行録真本』（南葵文庫、一九二二年一〇月）
 - (9) 史記十一（列伝四）（新釈漢文大系第九十一巻、青木五郎校注、明治書院、二〇〇四年）
 - (10) 前漢書（景印文淵閣四庫全書第二五〇冊所収、台湾商務印書館、一九八六年）
 - (11) 芸文類聚（景印文淵閣四庫全書第八八七冊所収、台湾商務印書館、一九八六年）
 - (12) 温公家範（景印文淵閣四庫全書第六九六冊所収、台湾商務印書館、一九八六年）
 - (13) 注(7)前掲書
 - (14) 注(8)前掲書
 - (15) 小学（新釈漢文大系第三巻、宇野精一校注、明治書院、一九六五年）
 - (16) 唐書（景印文淵閣四庫全書第二七五冊所収、台湾商務印書館、一九八六年）
 - (17) 注(3)前掲書
 - (18) 孟蘭盆経新記（新纂大日本統蔵経第二十一巻所収、西義雄・玉城康四郎監修、国書刊行会、一九七六年）
 - (19) 礼記（上）（新釈漢文大系第二十七巻、竹内昭夫校注、明治書院、一九七一年）。該当箇所は以下の通りである。
- 文王之為世子、朝於王季曰三、鷄初鳴而衣服、至於寢門外、問内豎之御者曰、今日安否何如。内豎曰、安。文王乃喜。及日中又至。亦如之。及莫又至。亦如之。其有不安節、則内豎以告文王。文王色憂、行不能正履。王季復膳、然後亦復初。食上、必在視寒煖之節。食下、問所膳、命膳宰曰、未有原。應曰諾。然後退。武王帥而行之、不敢有加焉。文王有疾、武王不説冠帶而養。文王一飯、亦一飯、文王再飯、亦再飯。旬有二日、乃閒。
- (20) 孝経（『孝経・曾子』所収、武内義雄・坂本良太郎訳注、岩波書店、一九四〇年）。該当箇所は以下の通りである。

子曰、孝子之事親也、居則致其敬、養則致其樂、病則致其憂、喪則致其哀、祭則致其嚴。五者備矣、然後能事親、事親者居上不驕、為下不乱、在醜不爭。居上而驕則亡、為下而亂則刑、在醜而爭則兵。三者不除、雖日用三牲之養、猶為不孝也。

親に仕える子が備えている五つの条件のなかに「病則致其憂」が書かれている。またこれは当該箇所に限ったことなく、注(17)で示した孟蘭盆経疏の前後の文脈で、

一云居則致其敬者、儒則別於犬馬、積則奉身七多……三病則致其憂者、儒中如文帝先嘗湯藥。……五祭則致其嚴者、儒有薦笋之流、積有餽飯之類。

と、同じように孝経紀孝行第十の一節を用いて説明を行っていることがわかる。つまり孟蘭盆経をわかりやすく解釈するために、唐代・宋代では孝行の例を用いていたということになる。

- (21) 牧田諦亮『疑経研究』(牧田諦亮著作集 第一巻所収、『牧田諦亮著作集』編集委員会、臨川書店、二〇一四年)

- (22) 王三慶『敦煌類書』(麗文文化事業股份有限公司、一九九三年)

- (23) 注(16)前掲書

- (24) 『言泉集』(古典文庫第六三九冊、畑中栄編、古典文庫、二〇〇〇年)

(いしい あやこ 文学研究科文学専攻修士課程)

(指導教員…黒田 彰 教授)

二〇一五年九月三十日受理